

花山多佳子歌集

『三本のやまぼふし』

(砂子屋書房)

六十代後半から七十代前半の時期の作品を収録した、第十二歌集。落ち着いたトーンの歌が並ぶ。

三時四時五時とめざめて時のすすみひたすら遅し老いのあかとき

老いを抗うでもなく淡々と詠んだ歌が多く、心惹かれた。結句、ひらがなの「あかとき」がやさしく沁みる。

厨事 忙しなければ自らの尾を追ふごとく回るこ

あり

何もかもすぐにはやりたくないといふこの心根をいかにかもせむ

忙しいときもあれば、やる気の起きないときもある。気負いのない作者の人柄だろうか、どの歌の内容も自然であり、読み進めるほどに、不思議と落ち着いてくる。

紙風船ついて数へる児の声が百すぎてゐることに気づきぬ

これはちよつとした驚き。あとがきに「相変わらず身のめぐりの狭い範囲の歌ばかり」とあるが、そこがよい。

ペランダの正面に回りくる月はいつもやまぼふしの木の裏にゐる

ほんやりと眺めていた、ペランダの前の三本のやまぼふしの木。一本伐られてしまつて、今は二本になっているそ

(片岡 絢)

高山邦男歌集

『Mother』

(ながらみ書房)

認知症の母との生活詠が中心。あとがきには、「(介護の) 困難とか苦しさをより楽しさや嬉しさを歌ってきた」「生きる」ということがモチーフとある。母の老いにつれ、歌材の世界が狭まっていき、歌集終盤は身の回りの歌がほとんどになりつつ著者は日に日に「生」を意識する。

母と歌ふさらさら星は途中まで買ひ物帰りの冬のゆふぐれ

母は母の夜の帳とばしを生きてゐてぼくは変幻の登場人物さらさら星が途中で終わるといふことは近所への買い物だろう。さらさら星と冬という取り合わせがあたたかい。

一方で、毎日母の中で変化する「ぼく」。悲しみは大きいはずなのに、道化的に詠む「ぼく」がどこかさびしい。

まだ母が元気なうちにわが家に犬こそ来たれワンワン吠えよ

「捨て犬保護施設」という一連。著者の名前を呼べなくなつてしまつた母であるが、それでも喜ばせたいという思いがにじむ。捨て犬にすら希望を見出す母への愛が分かる。

発条はつじょうが最後に鳴らす「チ」の音のやうに動きぬ母の左手

終盤の一首。徐々に弱まるゼンマイの音に、母の動きを重ねる。最後の一瞬まで、母との時間を生きた作者のあたたかさあたたかさがにじみ出る。

(早川晃央)